

中学の登校傾向が高校入学時の 時間的展望と 精神的健康に与える影響 —中学登校群の 高校適応促進要因—¹⁾

小野村樹美*・和田万紀**・
須永範明***

Time Perspective and Mental Health of Students without School Attendance Difficulties in Junior High School: Factors Facilitating School Adjustment of Newly Enrolled Senior High School Students

Jyumi ONOMURA*, Maki WADA** and
Noriaki SUNAGA***

We investigated the time perspective and mental health of students without school attendance difficulties in junior high school immediately after they entered senior high school in order to identify the factors those contribute to high school adjustment. The results showed that lower emotional distress and higher positive present perspective were positively correlated with lower feelings of school avoidance. Furthermore, a positive past perspective enhanced self-esteem, which in turn reduced distress and led a positive present perspective. It is, therefore, suggested that improving a negative past perspective and enhancing self-esteem are crucial for students of newly entering senior high school.

key words: time perspective, school avoidance, adjustment to high school

¹⁾本研究は第1筆者の日本大学大学院総合社会情報研究科提出修士論文を再解析し、日本応用心理学会第89回大会で一部発表した。都立神代高等学校の先生、生徒と保護者の方々のご協力に感謝申し上げます。

*神代高等学校
Jindai High School, 1-46-1, Wakaba-Cho, Chofu-City,
Tokyo 182-0003, Japan.
(Jumi_Onomura@member.metro.tokyo.jp)

**日本大学法学部
College of Law Nihon University, 2-3-1, KandaMisa-
ki-Cho, Chiyoda-Ku, Tokyo 101-8375, Japan.

***日本大学文理学部
College of Human Sciences, Nihon University, 3-25-40,
Sakurajousui, Setagaya-Ku, Tokyo 156-8550, Japan.

目 的

中学から高校への入学は学校移行として大きなストレスとなる。本研究は中学で登校に困難がない高校新1年生の時間的展望と心身のストレス反応が登校回避感情に与える影響を検討し学校移行時の適応促進要因を明らかにする。

方 法

調査対象と倫理審査

調査はX高等学校2022年4月入学オリエンテーションで行った。日本大学大学院社会情報研究科倫理委員会(承認番号HP21S008)、高等学校、教育委員会の許諾を得た。保護者と本人の両承諾書を得た場合のみ分析対象とした。

調査項目と評定

1. 自尊感情。東京都版自尊感情測定尺度(2012)、ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版(桜井, 2000)の16項目。2. 時間的展望。白井(1994)の肯定的及び否定的過去展望、現在展望、未来展望の各2項目。3. ストレス反応。三浦(2006)のストレス身体反応(食欲無し、不眠、頭痛・腹痛・発熱)とストレス感情反応(怒り2項目、嫌悪、不安各1項目、抑うつ感3項目)。4. 登校回避感情。学校に行きたくない、学校がなくなればよいの2項目。5. 無力感。朝起きてから何もやる気がしない、気が散って集中できないの2項目。6. 親の理解。親(親に代わる人)は私をよく理解しているの1項目。7. 勉強意欲。勉強に積極的だの1項目。8. 承認欲求。誰も自分のことを認めてくれないの1項目。9. 対人スキル。自分の思いを相手に言葉で言うことが難しいの1項目。以上の各質問項目に、自分の気持ちにあてはまらない(1点)からあてはまる(5点)までの5段階評定をした。

結果と考察

分析対象の新1年生280名中質問全てに回答した201名を中学でほぼ毎日登校(登校群以下A)188名、週又は月1、2回登校困難(登校困難群以下B)13名とした。オリエンテーション不参加で入学後保健室登校の1年生5名と保健室登校2、3年生3名の計8名を保健室登校群(以下C)とした。統計解析はSAS9.4とR4.2.2を使用した。

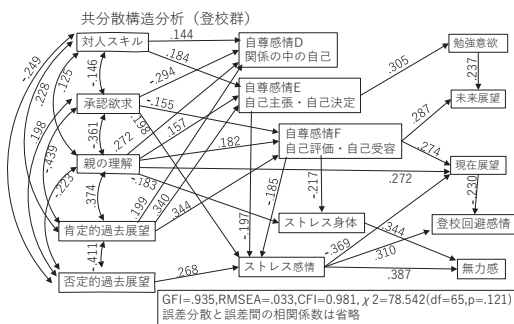
自尊感情16項目の因子分析(最尤法、因子数3、オブリンミン回転)より東京都版自尊感情測定尺度(2012)の3因子、関係の中の自己(以下D)、自己主張自己決定(以下E)、自己評価自己受容(以下F)を抽出した。ストレス身体とストレス感情反応、登校回避感情、無力感は各項目評定値の合計とした(各クロンバック α 係数は、.643, .823, .801, .723)。

A群の特徴の検討のため各変数で3群間比較を行った(Table 1)。A群は他群より登校回避感情が低い。また肯定的過去展望と現在展望は高いが、否定的過去展望と未来展望に3群間差は無い。ストレス身体、感情反応が他群より低く、自尊感情Dは高い。承認欲求はC群より低く対人スキルはB

Table 1 登校状況による各群の評定平均値と分散分析の結果

	登校群 A		登校困難群 B		保健室登校群 C		分散分析 (自由度 2,206)		効果量 η^2 乗	下位検定 チューキー法
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F 値	p 値		
自己評価・自己受容	3.64	.80	3.25	.91	3.10	.50	3.09	.048	.029	
関係の中の自己	3.98	.74	3.46	.76	3.25	.74	6.39	.002	.058	A>B (p=.041) A>C (p=.019)
自己主張・自己決定	3.86	.64	3.74	.74	3.63	.49	.68	.508	.007	
肯定的過去展望	3.81	.97	2.92	1.20	3.38	.79	5.61	.004	.052	A>B (p=.005)
否定的過去展望	2.73	1.02	3.31	.80	3.19	.70	2.74	.067	.026	
現在展望	3.80	.96	3.62	1.00	2.31	.96	9.27	<.001	.083	A>C (p<.001) B>C (p=.008)
未来展望	3.78	1.10	3.58	.79	3.31	.46	.93	.398	.009	
ストレス身体反応	2.15	.99	3.13	1.03	3.42	.61	12.00	<.001	.104	A<B (p=.002) A<C (p=.001)
ストレス感情反応	2.67	1.02	2.98	.86	3.75	.69	4.93	.008	.046	A<C (p=.008) A<B (p=.008)
登校回避感情	2.56	1.23	3.62	1.00	3.81	.96	8.28	<.001	.074	A<C (p=.013) A<B (p=.003)
無力感	2.70	1.20	3.19	1.35	4.13	.74	6.27	.002	.057	A<C (p=.003)
勉強意欲	3.09	1.07	2.85	.90	2.38	1.06	1.96	.144	.019	
親の理解	4.17	1.05	3.69	1.11	3.38	1.30	3.24	.041	.030	
承認欲求	1.98	1.04	2.54	.97	2.88	.64	4.44	.013	.041	A<C (p=.045)
対人スキル	2.79	1.29	1.92	.64	2.38	1.41	3.19	.043	.030	A>B (p=.046)

Figure 1 共分散構造分析 (登校群)



群より高い。勉強意欲に3群間差は無い。

A群の各変数と登校回避感情との関係検討のため共分散構造分析を行った。初期モデルは対人スキルと承認欲求、親の理解、肯定的、否定的過去展望が、自尊感情、ストレス反応、現在展望、勉強意欲、無力感を介して登校回避感情と未来展望に影響すると設定した。パスを削除追加して十分高い適合度と解釈可能なモデルを得た (Figure 1)。登校回避感情はストレス感情反応と現在展望が直接影響した。現在展望は自尊感情F、親の理解、ストレス感情反応から影響されるが、直接両過去展望からは影響されず、また直接未来展望へ影響しない。またストレス感情反応は自尊感情E、Fと承認欲求、否定的過去展望から影響され、直接登校回避感情と無力感へ影響する。否定的過去展望と肯定的過去展望は負の相関を持ち、両要因とも対人スキルと親の理解、承認欲求と相関する。そして否定的過去展望はストレス感情反応へ、肯定的過去展望は3種の自尊感情へ影響する。未来展望は自尊感情Eから影響される勉強意欲と自尊感情Fに影響されている。さらに親の理解は、対人スキル、承認欲求、両過去展望と相関し、3種の自尊感情とストレス身体反応、現在展望へ影響する。

またストレス感情反応と身体反応が無力感へ影響する。

A群では現在展望とストレス感情反応が登校回避感情に直接影響しており、この2要因の改善が登校回避感情抑制に有効である。またA群は否定的過去展望と未来展望に、他群と差が無い。そこで承認欲求に対する対人スキルの向上を支援し、否定的過去展望の改善からストレス感情反応の低下と肯定的過去展望から自尊感情を高揚させることで、現在展望から登校回避感情抑制が期待できる。さらに高校での勉強意欲を高めて確たる未来展望構築が重要となる。なお親の理解が多くの変数へ影響する点とストレス感情反応と身体反応が無力感へ影響する点はさらに検討が必要である。学校移行に伴う新たな時間的展望の構築が登校回避感情抑制に繋がり、高校生活適応に必要とされる。

引用文献

桜井 茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71. <https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/record/5924/files/9.pdf> (2023年10月27日閲覧)

白井 利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60. <https://doi.org/10.4992/jpsy.65.54>

東京都版自尊感情測定尺度 (2012). 東京都教職員研修センター紀要, 11. <https://www.kyoikukensyu.metro.tokyo.lg.jp/09seika/reports/bulletin/h23.html> (2023年10月27日閲覧)

三浦 正江 (2006). 中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討 教育心理学研究, 54, 124-134. https://doi.org/10.5926/jjep1953.54.1_124

(受稿：2023.9.21；受理：2024.1.10)